

第五章

牧羊犬と狩猟犬に見るモンゴル牧畜民と犬との関係： 内モンゴルバイリン右旗での聞き取り調査を中心に

一 関心問題

モンゴル社会では日常生活の中で犬を飼うことは重要な慣行である。そして、それはモンゴル文化ともなっているといえる。モンゴル族は遊牧民族なので、牧畜のために犬が不可欠である。犬は家畜を統率したり、オオカミなどの野獣の被害を防いだりしてくれるからである。斯琴巴特爾によると、機敏な犬は、20～30里先から他の人の声や野獣が出す音が聞こえてくるそうだ(斯琴巴特爾、1998、p.69)。

また、日常生活において、犬は門番としての役割をもっている。パオ(居住用の白いテント)のすぐ近くに犬がいて、人が眠っている間もいわば夜警にあたる仕事をしているのである。モンゴルの伝統文化のなかには犬に関する習慣や知識が多くある。モンゴル人が現実生活で犬を飼いはじめるときは、まず犬の子を丁寧に選び出し、その後、訓練をして牧羊犬か狩猟犬にするのである。

3章で、十世紀ごろの中国の遊牧民、遼代の契丹族の犬についての分析をおこなった。それは当然のことながら文献による研究であったが、文献に基づいているために、牧羊犬や狩猟犬について、知りたい事柄を十分に知ることができなかった。そこで、フィールドワークとして、嘗ての遊牧民モンゴルの子孫

の調査を行うことにしたのである。

以下では、中国の内モンゴル、バイリン旗での聞き取り調査の内容を中心にしながら、犬と人間との関係が狩猟民ではどうなっているかを明らかにすることにしたい。言うまでもなく、モンゴル族は狩猟民であるので、犬と人間との関係はとても強固である。その強固さとは具体的にどのようなものであるかを以下で示そう。

二 調査地域の概要

内モンゴルバイリン右旗

図(2)はバイリン右旗の位置である。バイリン右旗は内モンゴル自治区赤峰市に位置する旗の1つである。そこは内モンゴルの自治区の東部、赤峰市と西拉沐沦河の北部である。蒙、漢、回、や満などの民族がそこに住んでいるものの、そのうち、ここはモンゴル族の人口が一番多い。

地図から見ると、バイリン右旗は、ほとんどが村落の地域である。モンゴル族がもっとも多いので、商店街や市役所や政府などの掲示はモンゴル語と標準語(中国語)を使っている。さらにバイリン右旗の田舎、巴彥塔拉苏木などに行くと、店の名前もモンゴル語の字音で漢字で表現する看板が多い。ところで、モンゴルの地名は花か牧畜の名前で示されることがとても多いのが特徴である。

ところで、バイリン右旗は遼代の契丹族の発祥の地である。調査地は、バイリ

ン右旗の中心を占める巴彥塔拉苏木達蘭花嘎查という地区である。調査した時期は冬だったので黄砂が舞い、道は黄土となっていた。

砂漠地帯なので、夏になると日照りが強く乾燥している。ここに住んでいる老人と子供たちのほとんどは、モンゴル語と漢語の言語を両方使用している。ここでは他の少数民族の慣習が少しはあるが、基本的にはモンゴル族の伝統的な習俗が行き渡っている。



図(1)内蒙古自治区

出典: 『中国文物地図集 内蒙古自治区(上)』p.147



図(2)2018年バイリン右旗およびの周辺地図

三 狩猟犬及び方法

モンゴル族は数千年にわたる生活の過程で、豊富な狩猟方式を発展させた。狩猟方式は二つに分けられる。すなわち、個人的な狩猟と集団(団体、グループ)的な狩猟の巻狩りである。

個人的な狩猟は普通は季節を問わない。この狩猟の目的は食料の補給であり、少量の羊や兔などの草原の野生動物をあさるのである。他方、集団的な

狩猟は獲物を取り囲んで捕獲する。それは計画的であり、厳格な組織をつくり、また組織内の分業がはっきりしている。狩猟の過程では、リーダーの指揮に従って、一定のプログラムに従って進行させて行く必要がある。

狩猟の方法は基本的には三種類に分かれる。即ちひとつは狩りの工具を使って狩猟をする。二つ目は動物を利用して狩猟をする。三つ目はスモークを利用する方法である。

狩猟の道具は主に弓矢、猟刀、猟銃、馬の鞭などである。動物を利用して狩猟をする場合は、訓練した獵鷹や獵犬などを使って狩りをする。スモークを使うやり方は、主に獲物の穴に煙を流入させる方法である。獲物を穴から出させて、獲物を入手する。

モンゴル族は長期にわたる狩猟の過程の中で、固有の風俗を形成してきたが、同時に定着もしはじめた。日を選んである祭祀を行い、また、さまざまな儀式もある。狩猟においては獲物の割り当て方法、家畜を守る方法などについて受け継がれてきた。狩猟は主に秋・冬の時期に行なう。

はるか昔のモンゴルの人たちは、すべての獲物は天神および山神が支配しているとみなしていた。そのため狩りは吉日を選定する。また、「長生天」¹⁾を祭礼する習俗があって、山と水の神様を祭礼する。それ以外に、獲物にかかわる神を祭ることもある。なぜこのような儀式をするかという、天神と山神、水神の加護を求め、多くの獲物を得ることを目的としているからである。

日本でも、モンゴル族と類似の考え方があって、たとえば「水の神や風の神、雷神などは異なる自然神である。それらは先祖神と異なり、自然神は人間に対していつも良いことをしてくれる保障はない。これらの神さまの本性は自然なの

である。そこで必死に神さまに祈ることになるし、また講などの組織をつくって、みんなで神さまにお願いをしたり、感謝をしたりする」(鳥越皓之、2017、p.61)。

金子祥之の論文によると、「人々は水の神の祀ることによって、洪水を除けようとしてきた。祭祀祭礼を通じて自然は働きかけ安心を得るためにも水の神は重要な存在であった」(金子祥之、2013、p.224)と述べている。

すなわち日本人にとっても、天神と山神、水神はとりわけ生産にかかわって大切な神々である。その点は、同じ東アジアとしてモンゴル族と類似の信仰がみられるのである。

モンゴル族の人々は狩猟において、懐胎している母畜、それと幼畜を決して殺害しない。そのことで、生態のバランスを維持し、継続的に再生産を続けることを保証する。そのため、モンゴル族の狩猟活動は春や夏を除いた秋・冬に行われることになるのである。

以上がモンゴルでの狩猟の一般的な状況であるが、このたび、中国内モンゴルバイリン右旗で、狩猟犬を中心にしたモンゴル族狩猟の伝統的な祭りの調査をおこなった。モンゴル族は獵犬圍獵²⁾(圍獵)(取り囲んで狩る)の伝統的な祭りを伝承している。

六月になると動物の繁殖期間は終了する。この繁殖期間中は狩りをしないので、その期間中に祭りを行なう。そのため、バイリン右旗の圍獵の形をとって行なう祭りは、六月(旧暦)前までのつぎの三回行なう。それは中国旧暦の正月十七日、四月十七日と五月十七日と決まっている。

1 馬と猟犬

以下は烏雲巴特尔氏からの聞き取りである。

昔の内モンゴルバイリン右旗では、交通が不便なので、馬は日常生活で一番使いやすい交通手段であった。そのため、大人も子どもも馬に乗って、出かけるのが普通だった。彼の子どもの頃にはよく狩猟に行ったそうである。その時は、馬に乗り、猟犬を連れて狩りに行った。冬になると、彼は彼のお父さんとよく兎や黄色の野生の羊などの狩りに行く。遊牧民は狩猟のために訓練した自分の馬に乗って、猟犬と共に狩りに参加するのである。モンゴル族にとっては遊牧生活全般において馬と犬は欠かせない親密なパートナー的な存在と言える。

2 バイクに乗って狩猟をする

峰市巴林右旗巴彥塔拉蘇木達蘭花嘎查

写真(1)と写真(2)に示すように、現代では馬に代わってバイクを使うことが多くなった。写真に見る若者はバイクに乗って、5匹の猟犬を連れて、兎狩りに向かっている。

現代では、野性動物の数が減少してしまったので、狩りがしにくくなった。しかし当地では、猟狩りは年配の人たちだけの人気ではない。若者たちの間でもバイクに乗って狩りに行くことにはとても人気がある。



写真1 バイクに乗ってウサギ狩り



写真2 バイクに乗ってウサギ狩り

3 社会環境の変化による猟犬の激減、伝統的な祭祀の減少

遊牧民には自然に規制された固有の特徴がある。歴史文化的経験を経て、遊牧生活に適応した草原の民居形式が形成されている。いつでも移動するモンゴルテント、フェルト帳などがそうである。

しかし時代の変遷、草原の退化と社会的制度の変化によって、草原の人々が草を追って住む生産と生活の様式も次第に変化してきた。現代の遊牧民においては定住家屋がモンゴルのパオに取って代わった。定住家屋が草原上に現れる。それは都市の住宅を模倣したものともいえよう。

草原の退化と砂漠化は遊牧民の生活に多大の影響を与えた。現在ではほとんどの遊牧民はすでに本来の草原の生活から離れてしまっている。そのため遊牧民の伝統的な祭祀は欠落し、過去の祭祀と断絶さえもしている。社会の発展につれて、また時代の変化によって、かれらも便利な生活を送ることに熱心になった。生活の都市化は、若い人たちに伝統的な文化に触れる機会を失わせつつある。

例えばポオ祭祀や狩猟祭りなどが減った。また、昔、遊牧民族にとって猟犬は欠かせない存在だったが、社会の変遷や時代の進歩につれて、遊牧民も高いマンションに住むようになり、その結果、伝統的な家に住まないため、犬の飼育がむずかしくなり、猟犬の数が減りつつある。

それでも、伝統の猟犬狩りに興味を持っている一部の若者たちがおり、伝統的な文化の習慣を続けていることは光明であるとも言える。そういう伝統が守られている地域の伝統的な猟犬狩りを以下に示そうと思う。

4 罽獵風景

写真(3)と(4)は2018年3月4日 罽獵 (春節後正月十七)の朝である。若者たちは狩りを始める前に友人たちと雑談をしている。写真に示すようにそのまわりに獵犬たちがいる。かれらが出かけるときには獵犬とバイクを車の後ろに乗せる。車は山の麓に駐車させ、その後、山の中へはバイクに乗っていくことになる。そのバイクの周辺を獵犬は走って行くのである。



写真3 狩獵する前の若者たちの集まり



写真4 達蘭花嘎查で狩り前に獵犬について話す

四 烏雲巴特爾氏について

2018年3月4日 围猎（春節後正月十七）

内蒙古自治区巴林右旗巴彥塔拉蘇木達蘭花嘎查

調査人物：烏雲巴特爾氏（蒙古族） 初八氏（蒙古族）

バイリン右旗での調査において、初八氏、67歳と烏雲巴特爾氏、57歳「写真(5)左」からの聞き取りを主に紹介する。写真(5)右の人の名前は初八という。初八の日に彼が生まれたので、初八という名にしたと言われている。彼は、現在は牧畜を営んでいる。かれは牧場で羊や牛など数百匹を飼育している。

写真(5)は烏雲巴特爾氏と初八氏のそれぞれの猟犬であり、これから猟をするところである。



写真5 猟犬はウサギを狩ったシーン



写真6 狩猟をする前に

時代が変わったことにより、各地で多くの建物が建設され、その結果、狩猟の場所が少なくなってきた。達蘭花嘎查にある小さな山で、初八はモンゴル族の伝統的な狩猟方法で、猟犬を使って兔を獲物した。彼はすごく楽しんでいたように見える(写真7)。



写真7 初八氏の猟犬は兔を獲物し

写真(8)は初八氏の猟犬があたらしい獲物を探しているところである。しかし、野生動物の数が昔よりかなり減少したので、多くの獲物はとれなくなっている。



写真8 猟犬は獲物を探す

彼は若い時分から、毎年正月十七日の祭りに参加するのだが、かつては、野生動物は種類と数とその祭りの時

期はとても多かったそうだ。初八氏が手に持っている棒はモンゴル語でボロー棒と呼ばれている。ボロー棒は猟狩り専用の道具である。「このボロー棒のモンゴル語は「布鲁」と言い、これで、ウサギを捕まえる。普通は榆木、木綿、クヌギ木で作っている。山から切った後は、必要な形をのこぎりで整え、それから水を入れた鍋を熱湯にし、やわらかくしてから、力を入れて弧にして、ロープで縛っておく。しばらく干した後、刃物で修正し、片端を「L」の字に曲げる。長さ40センチ、頭部長は20センチ」(呉学智、2013年、p.2)である。



写真9 もう一匹野生兔を獲物し

初八氏が言うには、生活が現代化されその結果、不便と危険な生活がなくな

った。しかしそれと引き換えに、かれらは伝統的な家で犬を飼うということがほとんどできなくなった。伝統的な家では何匹も犬を飼うことができたが、現在では一匹だけ犬を飼うということが普通となった。

五 モンゴル族と犬

烏雲巴特爾氏が言うには、犬は遊牧民族にとって、一日の生活のなかでもつねに存在するもので、家族のようなものである。さらには家の留守番もしてくれる。そのため、犬の役割は他の動物には代替できないものである。

かれらが牧羊犬を飼いはじめるのは、犬が幼犬のころからである。まず、犬の質が大切だから、丁寧に品種を選ぶし、必要があれば異郷にまで探しに行く。幼犬の養育には主に人間の食事の残りの乳食とお米である。冬には牛と羊の骨を与えることもある。犬は羊や牛と異なり、家畜のなかで、唯一名前をもっている。犬は家族の一員とみなされているからである。

草原にいる牧民は犬を放し飼いにする。鎖に結び付けないし犬小屋も作ることはしない。秋になって、祭りのときに、家畜を大量に屠殺するので、そのときに、牧民は犬と一緒に肉のついた良い食べ物を共有することになる。最近は、土地の砂漠化の進行(草原での車の使用など人間による草原の破壊)によって、羊の数が減少したので、それにつれて牧羊犬も減少した。

遊牧民は幼犬のころからウサギやイタチを追わせて、その反応と敏捷さを訓練する。遊牧民が育てた犬は四季を問わず、また昼夜を問わず、家の外回りを

監視する。狩猟の季節には野鹿を追いかけ、また狼を襲撃する。犬たちは体が丈夫で主人に忠実である。その猛々しくなく、凶暴でもない性格が主人に愛される。

烏雲巴特爾氏はつぎのような実話を紹介してくれた。

1980年代の末、巴林(バーレーン)草原が干ばつに見舞われた。草場と牧場は極度の草の不足となった。故郷の民々を助けるために、烏蘭(ウラン)牧騎³⁾の青年たちが西烏珠穆沁草原⁴⁾に草を刈り取りに出かけた。西烏珠穆沁⁴⁾草原は秋の空が高く澄みわたり爽やかだ。烏蘭(ウラン)牧騎の青年たちは緑深く艶やかな草を刈り取っていたが、そこで事故が発生した。

駿馬にまたがる青年が飛ぶように速く走ったのだが、そこに邪風が吹いてきた。そのため馬が驚き、馬は猛烈な勢いで走りはじめた。そのため青年は馬の背から落ちて意識を失った。その様子を見ていた人々が追いついてきた。けれども落馬した主人について走ってきていた黒い犬が、近づいてきた知らない人々を、意識のない主人にどうしても近寄らせない。そのため人々はどうすることもできなかった。そこで、草原のそこから遠くない家の人に助けを求めるしかない。人々が遠くなると、犬は馬の逃げた方向に向かって追いかけて行った。遠くから馬の手綱をくわえて走ってきたのである。

しかし、主人はまだ目を覚ましていない。黒い犬は手で主人の体を叩きつづけ、吠えつづけた。そしてついに主人が目覚めた時に、黒い犬はすぐに主人の懐に飛び込んできた。そのときの犬の甘えた様子を主人は現在でもまだはっきり覚えているということだそうだ。

六 獵犬の伝統的な訓練方法

モンゴル族が犬を訓練することにおいては、その始まりは明確ではないものの、少なくとも千年以上の歴史がある。長い歴史の中で豊富な経験を積んできている。彼らは犬を飼い始めると、その訓練は非常に厳しい。

牧羊犬としての犬は主人にとっても忠実であり、前節の最後に例に出したように、事故があれば主人のことをとても心配して対応する。犬は多くの人たちが群がっていてもその中から自分の主人や家族を簡単に見分けることができる。牧民の家の犬は、たまには他の人に連れて行かれることがあるが、そこから逃れることができたならば、どんなに遠くても自分の家を見つけることができると言われている。決して帰る方向を見失うことはないそうである。

犬の訓練について斯琴巴特爾は次のように言っている。「犬を訓練する時には、まず、ロープで連鎖して、吠えないように鍛える。その後、さまざまな地形や距離を違えて、獲物を追いかけていく訓練をする。獲物を捕まえられなかったり、獲物を追う勇気を失ったりすることもあるので、それに対応する訓練も必要である。獵犬が獲物を捕まえると、ご主人を待って、他の獣や鳥に食われないようにしなければならない。主人の許可なしに、獲物を食わず、獲物の毛皮を損なうこともないようにする。獲物を捕ると、ご主人は褒め、獲物の内臓などを食べさせる。

もし主人が来る前に獲物を放したり、獲物を食べたり、毛皮を壊したりすれば、主人は犬に適切な罰を与える。たとえば、大声で叱ったり、食べ物を与えないようにしたりする。しかし絶対、犬に暴力をふるうことや打つことはしない。獵犬

は獲物を追う以外のおときには、鎖に結びつけられている。猟犬は他の動物を追う習慣があるので、猟犬と羊群とが一緒にいることはできない。それは羊群を傷つけることを防ぐためである」(斯琴巴特爾、1998)。

紮格爾の論文はつぎのようにいう。「モンゴル族は古くから、猟犬を馴すことに特別な配慮をしてきた。具体的な訓練方法を述べると、例えば、狐、狼、カモシカなどの獲物を取り囲み捕獲する方法。あるいは獲物の行方を追跡する方法がある。皮の毛の値打ちの高い獲物を捕獲するときは獲物の皮を破損しないようにしなければならない。これらそれぞれ固有の訓練をする。とくに獲物の足跡を追跡するときの訓練は正確な追及が要求される」(紮格爾、2002)。

モンゴル族にとって、獲物の収穫の多少は生活にかかわってくる。狩猟において収穫がないと、モンゴル語では「甘吉嘎毫森」という。それは空手で帰るという意味で、それについてはつぎに述べるような解釈がされた。

「古い時代から、手ぶらで帰らねばならないという結果を引き起こしたばあいは、その原因として、何かが祟りをしているとか、狩りの牧民の不運によるとかと解釈された。それを避けるため、「火浄化」という風習があった。猟狩をする前に、火浄化の儀式を行なう。その儀式は二種類に分けられる。

ひとつは、猟犬火浄化儀式、もうひとつは獵人の火浄化儀式である。獵犬の火浄化儀式は、具体的には、かがり火を二山にして、それから獵犬をこの二つの火の中を突き抜けさせる。棘のある枝で獵犬の鼻を打つ。そして、獵犬の尾の毛を焦がすのである。二つ目は人間である獵人の火浄化儀式、具体的には、まず獵師はかがり火の間を突き抜ける。子供や妻が木の枝を持って続いている。「温都塔必」(温都塔必はモンゴル語で、運の悪気を取り除くという意味)と

口で叫ぶ。そして、獵人服の下部あたりに枝を打ちつける」(紮格爾、2002、p.5)。紮格爾は、このような儀式は火を崇拜していた古代のモンゴル族の原始的な風習遺制であると解釈している。

モンゴル族には狩猟には厳しい制限がある。たとえばすでに述べたことではあるが、「狩りの対象は主に黄羊とウサギなどであるが、懐胎動物を殺害したり傷つけたりしてはいけない。乳児と赤子は殺害し、傷害してはならないなどの制限」(紮格爾、2002、p.6)などである。

このようにモンゴル人は年中行事の中に、また狩猟に至る過程に各種の儀式や風俗習慣を強くもっている。

七 牧羊犬についての聞き取り

牧人である烏雲巴特爾さんが、牧羊犬についてつぎのように説明してくれた。モンゴルの人たちは牧羊犬が生後2ヶ月から3ヶ月ぐらいのときから、牧羊のための訓練を始める。子どもの牧羊犬にその母の犬の真似をさせて、牧羊の能力を伸ばしていく。たとえば、遊牧をするときに、幼犬と母親とを一緒に行動させる。そうすると、危険な野性動物が出て来たときに、幼犬はお母親と同じ行動をする。そのことで、幼犬は野生動物に対する対応を覚えるのである。

牧羊犬が病気になると、当地の習慣としては、モンゴル族の薬「蒙薬」を飲ませる。基本的には、獣医に治療をお願いすることはない。牧羊犬が死んだ場合、とくにそのための儀式はなく、また埋めることもしない。もし牧羊犬の主人が牧

羊犬より先に死んだとしても、現在では主人と一緒に埋葬することはなく、主人の子どもたちや親戚などにその犬をあずけて、そのまま牧羊犬として飼うことになる。牧羊犬は猟犬と性格が異なっている。つまり、猟犬よりもおとなしい。そのため、牧民の家で、牧羊犬と羊たちとが共に混じって住むことができる。

この聞き取りの内容を補填する意味で、斯琴巴特爾の論文から類似の内容の箇所を引用しておく。「牧羊犬と番犬の馴養方法は猟犬とはまったく違う。種類も違うし、訓練と飼う方法も違う。牧民たちが牧羊犬の幼犬時から、羊と一緒に暮らす習慣をつける。牧羊犬は常に主人と協力する暗黙の了解がある。もしご主人が羊の群れを管理しているならば、牧羊犬は羊の群れの後方にいる。あるいは、牧羊犬が羊の群れの前にいたら、主人は羊の群れの後方にいるようにする。

牧羊犬は夜には、羊の群れを守る仕事がある。他の野獣に襲われたり、あるいは羊の群れが夜になって散ってしまうことを防がなければならない。普通は猟犬は主人と同じ部屋で寝ることができる。しかし、牧羊犬にはそれは許されていない。牧羊犬は寒暖を含む四季の間も、ずっと外にいる。さらに羊の群れの周りにいなければならない。牧羊犬は体が高くて、毛が深くて、吠える声が大きくて、嗅覚はとても鋭敏になるようにする。

じつは番犬と牧羊は同じ品種である。ただ訓練の方法が異なる。番犬は主人が家にいないときは、家の門戸を見守る。悪者を防いだり、野生動物が部屋に入ってくることを防ぐ。番犬は主人が外出をする時に、いつも連れ行くことはない。しかし、たまたま番犬が主人と一緒に出かけて、途中で主人が帰宅するように伝える命令を出したら、番犬はキチンと家に戻る(斯琴巴特爾、1998、

pp.70-71)。

八 環境の変遷

そもそも狩猟文化は、人と自然との関係で成り立っているが、とくに、人間と動物、また自然と動物との間の生態系を基盤として成立している。

たいへん昔のモンゴル族は、放牧ではなくて採集(野果、野菜)と狩猟で暮らしていたと伝えている。薩如拉の論文によると、モンゴル族の生活は自然との関係が直接的であるという。たしかにそうであろう。かれらの生存はつねに自然の脅威を受けつづけながら維持されてきた。モンゴル地域の地理環境は生活と生産のありようを大きく支配している。

その結果として、宗教信仰、禁忌祭祀、生態(人間による自然環境)の把握は内在的につながっている。モンゴル族はシャーマニズムを信じている。このシャーマニズムの発生はおそらく人間の自然との間の距離の近さが関係しているだろう。日常の狩り生活中で、シャーマニズムを頼んで、いろいろな祈りの儀式をする(薩如拉、2014)。

ところが、最近に至り、近代化にともない、過放牧や車による草原の破壊などを通じて、草原は減少しはじめ、遊牧民の生活は、順次むずかしくなりつつある。

斯琴巴特爾は以下のように述べている。その言っていることを要約する。すなわち、現代社会の人口の増加などさまざまな原因で、草原の劣化は非常に

深刻で、多くの動物が減少して、絶滅にまで至る動物もいる。そのため、国は様々な法令を發布し、いくつかの自然動物を捕獲することを禁止している。その結果、牧民たちは狩猟ができなくなり、結果として猟犬を育てることをやめつつある。つまり羊群と家を守るために、牧羊犬と番犬だけを飼うことになった。そのため犬に対する飼い方は簡素化され、きびしく犬を訓練する方法や規則が消滅の過程にある。

しかしながら、草場を失い、放牧も消滅の過程にあるとはいえ、養犬の伝統的な習慣は少しは残っている。ただ、それらの犬は狩猟犬や番犬とは言いがたい。家で犬を飼うことは縁起がいいということもあり、ペットとして飼うことになってしまいつつあるのである(斯琴巴特爾、1998)。

九 結論

犬はモンゴル民族の生活に深く関わっている。草原で犬を飼っていない家はどこにもない。犬は昔から家族の一員とされてきた。そして、野良犬も殺してはいけないし、犬肉を食べるのは避けられている。とくに最近に至り、蒙古地域には環境の悪化によって、狩猟犬と牧羊犬に関わる伝統風習は消えつつある。現在では猟犬と犬を連れて猟をする人の数が少なくなってきて、牧羊犬も見ることがなくなってきた。現代、外来人口の増加により、往々にして犬が人を噛むことが発生して、牧民は事故を恐れて、犬を鎖などで結び付ける措置を取りはじめている。

本章では、中国内モンゴルバイリン右旗の巴彥塔拉蘇木達蘭花の調査において、烏雲巴特爾氏と初八氏たちからの聞き取りに基づいて、伝統的な狩猟方法、牧羊犬トレーニングと獵犬の実行過程の両面から、詳しく調査に行った。文献と現地調査の両面で得た情報を照らし合いながら、次の7点を明確にした。

遊牧民にとっての犬はつぎのような固有の人間と犬との関係をもっている。

1つは、モンゴル族は犬に対して特別な感情を持っている。狩猟の犬として使っていることの延長として、犬と一緒に暮らすことは当然としても、家族の一員とみなしているふしがある。他の動物と異なり、犬にだけ名前を与えている。

2つめに、犬は人間性に通じる「忠実な仲間」とみなされている。烏雲巴特爾氏の実話にもあったように主人に対してとても忠実であることが理想とされている。

3つめに、犬と人間との間の関係は遼代の契丹と異なり、直接に生産にかかわる信仰(火浄化儀式など)であり、犬があの世界での幸いをもたらすというような考え方は存在しない。犬が死んでも、特定の儀式はなく、そのまま放置される。

4つめに、牧羊犬や狩猟犬を育てるには固有の厳しい方法(ただし犬に暴力を与えることは絶対にしない)があり、その具体的方法は本文に述べたとおりである。

5つめに牧羊犬、狩猟犬、番犬はもともと同じ種類の犬であるが、その養育法の差異によって、このような役割の異なる犬が成立した。

6つめに、かつて馬は牧畜として、また日常の生活として不可欠なものであったが、現在の若者たち、モンゴル族は犬を連れた狩猟においては、馬では

なくバイクを使うようになった。

7つめに、環境が変わると、犬に対する飼い方は簡単化され、さまざまな習慣や犬を飼う規則が消えていく。現在、牧羊犬や狩猟犬ではなくて、家で犬を飼うことは縁起がいいとみなし、ペットとなりつつある。そして犬を鎖などで結びつけるようなことも当たり前になってきた。

以上の7つにまとめられよう。近年、社会発展と人々の生活水準が向上し、遊牧民が住む内モンゴルにおいても、都市化がすすみ、犬は牧羊犬や猟犬としての役割を急速に減少させて、犬を飼うのはファッションとなり都市住民の生活に欠かせないペットに変貌しつつあり、その実態は、中国全土の農村や都市とあまり変わらなくなりつつある。

参考文献

日本文献(五十音)

金子祥之 「川のなかの定住者たちの災害対応－利根川・布鎌地域における水神祭祀－」、『環境の日本史5自然利用と破壊－近現代と民族－』、吉川弘文館、2013年

鳥越浩之、『自然の神と環境民俗学』、岩田書院、2017年

中国文献(ピンイン)

常睿、「内蒙古草原牧民生活時代調査与民居設計」、西安建筑科技大学学位论文、2016年

胡日查、「百科 | 蒙古族人信仰狗的習俗」、『搜狐新闻』、2018年

拉希尼瑪、「蒙古人对狗的認識」、内蒙古大学修士論文、2013年

纳音泰、「談蒙古人養狗風俗的文化內涵」、『中国蒙古学』、2011年第4期

紮格爾、「蒙古族狩猎習俗」、『内蒙古師範大学学报(哲学社会科学版)』

2002年第1期

『中国文物地圖集 内蒙古自治区(上)』、国家地圖出版社、2001年 p.147

薩如拉、「早期蒙古族狩猎文化中心的生態思维」、『資治文摘』、2016年第6期

斯琴巴特爾、「蒙古族狗文化淺談」、『青海民族研究』、1998年第2期

苏雅拉圖、「蒙古族馴養犬之習俗探析」、『内蒙古師範大学』、2008年

吳学智、「淺談蒙古人的狩猎習俗」、内蒙古師範大学鴻德学院、修士論文、

2013 年

1) 長生天

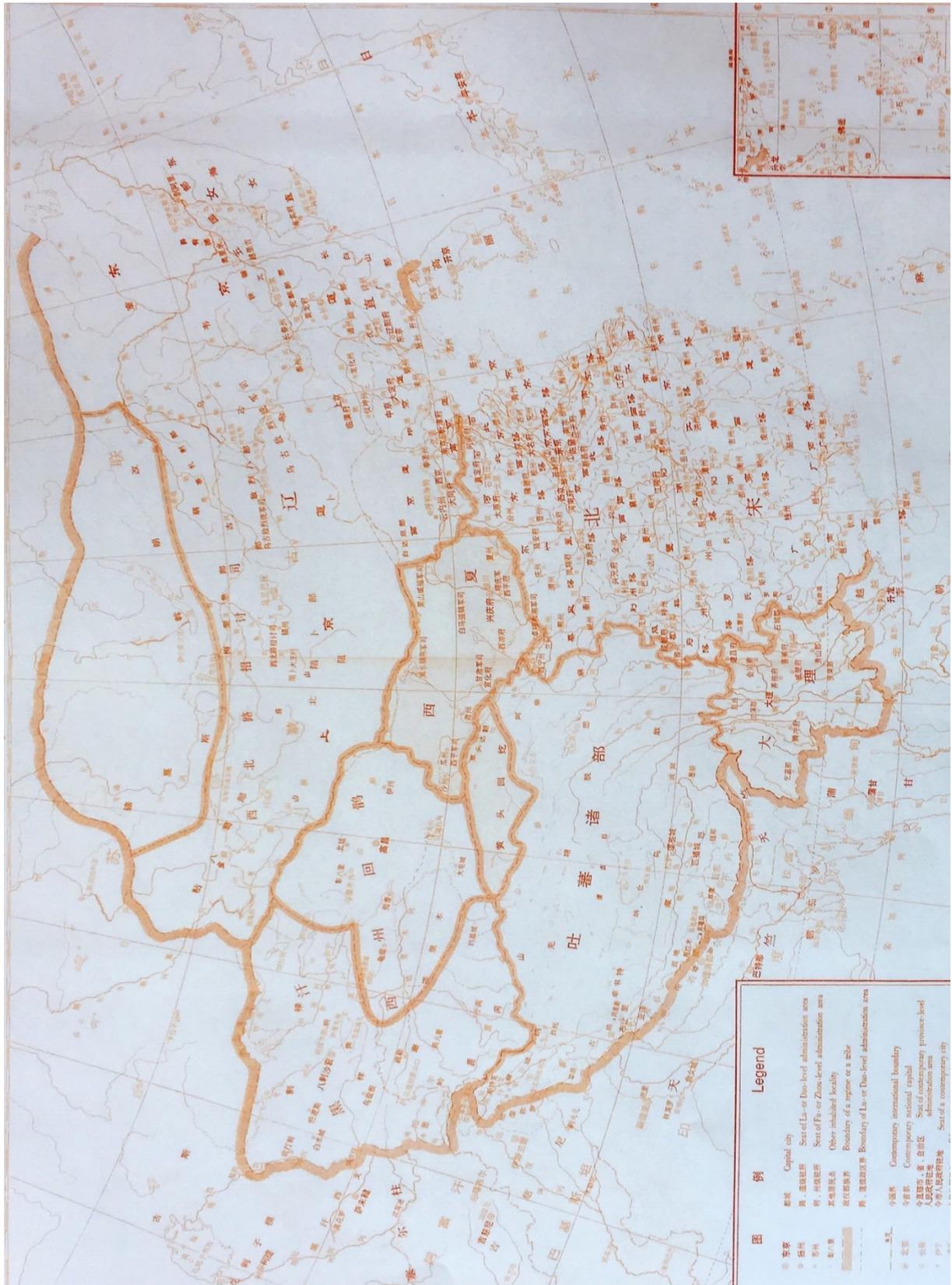
モンゴル民族は「蒼天」を永遠に最高の神としている。モンゴル語は「騰格裏」である。モンゴル人自身の思考モードにおいて、至高の権力「長生天」(つまり草原の遊牧民族の神)が地上の首領を授けた。

2) 囲獵 四方をとり囲んで獵をする、狩獵のこと。

3) 烏蘭(ウラン)牧騎

1957 年に内モンゴルの大草原に誕生した。赤文化工作隊として、草原農園やモンゴル包の間に活躍する文芸チームである。

4) 西烏珠穆沁草原 世界の四大草原の一つである。



出典『中国歴史地図集』第六册
 地図出版社 p.3-4

おわりに——結語

中国と日本の犬についての研究史の指摘に従うと、犬は人間界で、重要な機能と作用を持っている。犬は昔の研究で紹介したように、政治的、経済的、文化的な存在である。すべての動物の中で、犬と人間との関係は総合的なものである。

中国と日本の文献を歴史的にならべてみると、犬は現在のようなただのペットではない。文化史的な視点から見ると、犬は人間に対して、価値観を共有する大切な伴侶のようである。

本稿の各章で述べたが、日本にかぎらず中国においても、犬についての神話・伝説が多い。また犬は人間よりも、霊力、超能力を持っていると信じられてきた。また実際的な面において中国では犬の肉食の文化ももっている。

現在の中国における一般的理解としては、鬼は人間に災いをもたらす。それに対して、犬は驅鬼除災の機能をもっていると思われる。そのため、中国人にとっては、犬は縁起の良い動物であり、もし誰かの家に突然一匹の犬が来たら、主人は喜んでそれを引き取る。それは財福をもたらすと信じるところがあるからである。

しかしながら、中国の古代の文献を丁寧に読み込んでみると、このような現在の一般的理解を支持する側面があるものの、それとは異なった見解、また、矛盾する見解があることも分かった。日本との差異を意識しながら、古代中国の犬についての考え方をまとめよう。

犬に対する基本的な対応であるが、日本では犬の墓をつくったりして、犬に

対するいたわりの感情が出ているが、古代中国では、犠牲の犬として、犬が献じられている。それもときには、一度に多数の犬が殺傷され、それが献じられている。古代中国では、犬の血を使うことがあるように、犬を犠牲獣として殺すことが少なくないのである。

日本でも古代中国でも白い犬が注目されている。日本が中国の書物を通じて、古代中国の考え方を受け入れた可能性を否定できないものの、日本での白い犬への注目は中国の白い犬への注目の影響であるとは、必ずしも現存の資料では言い切れない。日本では伝統的に犬に限らず、白ということに特別な配慮を行ってきたからである。

犬は人間に対して忠実な動物として、日本でも中国でも位置づけられている。これは共通点である。ただ、日本では素朴に人間に対して忠実な犬という位置づけであるが、古代中国ではやや込み入っている。

中国では、本来人間は、他の人間(おそらく主人などの権力者)に対して忠実、すなわち「忠義精神」をもたないといけないのだが、それを本当に実現しているのが犬だ、という言い方になっている。その例を「忠実な導犬」で紹介した。そこでは、犬は主人を心配して自分の「餌を食べようもしない」というような犬の美談になって記されている。

とりわけ古代中国では、犬は生者を守るためだけではなくて、死者をも守護すると考えられていた。当時、地中には悪霊がいると信じられていたために、どうしても亡くなった人を守護するものが必要とされ、それが犬殉葬となったのであろう。ひとりの人間のために多数の犬を献じられることも行われた事実は、逆にどれほど地中の悪霊を恐れていたかが分かる。

犬は魔よけや厄除けとして信じられ、そのために犬を殺したり、ドアにその血を塗るということが行われた。犬を殺したり、犬の血にマジカルな力があるという発想は、日本ではみられない。あえて言えば、日本では赤ん坊のおでこに赤字で犬という字を書く習慣をもつ地域があるが、これを血と結び付けるには少し無理があるだろう。

日本でも犬は「辟邪能力」があり、産育習俗と関連性があるという研究を紹介した。中国では、産育との関連性はいまのところみつけれられていない。中国古代の魔よけや厄除けというのは引用した文献から知られるように、とんでもない悪害を防ぐためである。

犬には予兆能力がある。悪霊による異変をいち早く察知する能力のことである。引用した文献では、犬が吼えたので地震が予兆できたとある。この犬がもつ特殊な能力評価は、「天狗食日」の話にも現れている。

中国では、犬は水とのつよい関連性がある。これは日本にもみられる信仰である。ただ、中国固有の考え方として、水が地下の世界に通じているので、水脈を経て地下の世界を察知する能力があるというものである。この固有の考え方が、おそらくまた中国古代の信仰であった犬が雨をもたらすという雨乞い信仰を生み出したのではないだろうか。この場合も犬は殺されて泉に投げ込まれている。

古代中国では悪霊(鬼)に対する脅威感が強く、それを防いでくれるものとして、犬に期待するところが大きかったといえる。それを防げるだけの特殊能力を、人間は犬に期待したわけであり、それは犬が予知ができるため、正邪を判断できる人間にない能力をもっていると信じたことを根拠にしている。そしてなんと

っても犬が人間に忠実であることが、犬に大きく期待したことと関連性があるだろう。

犬は日本では大切にされたようであるが、中国では、大切にされたものの、殺されることも多かった。犬が死ぬことによって、冥界で悪霊などと戦えたのであろう。しかし、それは生きている犬にとっては不幸なことで、本文の第二章の最後に紹介したように、献ずる犬の不足が生じ、草で編んだ犬が登場することにもなってしまったのである。

第三章でとりあげた遼代の契丹族においてはシャーマニズムという信仰が強い。また中国の中心の民族である漢族と異なり、狩猟が主な生業なので、自然環境および動物との距離が近いことが特徴である。

ただ契丹人にとっての犬についての考え方は、中国古代漢族と基盤を同じくしているように思われる。すなわち、「辟邪趨吉」(邪を避け、吉を生み出す)という考え方と「人間に忠実」であるという判断がある。また、古代漢族と同じように契丹人も隕石のことを犬になぞらえて、「天狗」と呼んでいた。

契丹の犬について、二つにまとめた。一つ目は、犬は霊的な意味としてまとめられるものである。古代中国の漢族とおなじく契丹族も、犬は死者を守護するために必要であるとみなしていた。生前のようにご主人を守ると考えていたのである。契丹族は伝統的なシャーマニズムと外来の仏教の両方の影響を受けていた。その信仰のもとで、犬を含む動物全般を崇拝の対象にしていた。遼代の皇帝陵の鎮墓石に見られるようにそこに犬がいる。「石犬」が人間のすぐ近くにいる事実は、契丹人と犬との強い関係性を示している。「石犬」は主人を守る能力を持っていると信じられていた。古代漢族でも犠牲にして埋葬した犬は主

人を守ると信じられていた。

二つ目は実用性(狩猟・遊牧)からまとめられるものである。契丹族は遊牧民族なので、通常の狩猟の生活においても犬は不可欠だ。猟犬と人間との関係は遊牧民族特有な文化ともいえる。犬は狩猟のために特有の能力を期待されたようである。古代漢民族も遼代の契丹人も、犬は不可欠な生き物であり、同時に霊物でもある。とくに契丹人にとっては、犬についての一年間の祭祀は大切な年中行事でもあった。

他方、内モンゴルでのフィールド調査の結果によると、犬はモンゴル民族の生活に深く関わっている。草原で犬を飼っていない家は一軒もない。犬は昔から家族の一員とされてきた。そして、野良犬も殺してはいけなし、犬肉を食べるのは避けられている。特に近代において、蒙古地域には環境の悪化によって、狩猟犬と牧羊犬といった伝統風習は消えつつある。現在では猟犬と犬を連れて猟をする人が少なくなってきた、家で犬を飼う牧民もだんだん少なくなり、牧羊犬も見ることがなくなってきた。現代、外来人口の増加により、往々にして犬が人を噛むことが発生して、牧民は事故を恐れて、犬を鎖などで結び付ける措置を取りはじめた。

中国内モンゴルバイリン右旗の巴彥塔拉蘇木達蘭花において、伝統的な狩猟方法、牧羊犬トレーニングと猟犬の実行過程の両面から、調査に行った。遊牧民にとっての犬はつぎのような固有の人間と犬との関係をもっている。

モンゴル族は犬に対して特別な感情を持っている。狩猟の犬として使っていることの延長として、犬と一緒に暮らすことは当然としても、家族の一員とみなしているふしがある。他の動物と異なり、犬にだけ名前を与えている。犬は人間

性に通じる「忠実な仲間」とみなしている。烏雲巴特爾氏の実話にもあったように主人に対してとても忠実であることが理想とされている。犬と人間との間の関係は遼代の契丹と異なり、直接に生産にかかわる信仰(火浄化儀式など)であり、犬があの世界での幸いをもたらすというような考え方は存在しない。犬が死んでも、特定の儀式はなく、そのまま放置する。牧羊犬や狩猟犬を育てるには固有の厳しい方法(ただし犬に暴力を与えることは絶対にしない)があり、その具体的方法はすでに述べたとおりである。狩猟犬、番犬はもともとと同じ種類の犬であるが、その養育法の差異によって、このような役割の異なる犬が成立する。

かつては、馬は牧畜として、また日常の生活として不可欠なものであったが、現在の若者たちは犬を連れた狩猟においても馬ではなくバイクを使うようになった。環境が変わると、犬に対する飼い方は簡単化され、さまざまな習慣や犬を飼う規則が消えていく。現在、牧羊犬や狩猟犬ではなくて、家で犬を飼うことは縁起がいいし、あるいはペットとしてだけになりつつある。そして犬を鎖などで結びつけるようなことも当たり前になってきた。

近年、社会発展と人々の生活水準が向上し、遊牧民が住む内モンゴルにおいても、都市化がすすみ、犬は牧羊犬や猟犬としての役割を急速に減少させて、犬を飼うのはファッションとなり都市住民の生活に欠かせないペットに変貌しつつあり、その実態は、中国全土の農村や都市とあまり変わらなくなりつつあるのである。

現代になると、通信や交通など便利になった。犬は愛玩犬として、登場している。

もっとも現在でも地方においては、とくに少数民族は犬に関わり祭祀やトー

テム信仰などを保持している。古代から、犬は厄除け、魔除け、吉祥な機能を持ちそれはその機能の強弱の差はあれ、現代まで続いている。現代中国の各地で、生活の中で、犬の図や形はよく見られる。民族伝統的な民族服装や民族工芸品やデザインとして登場しているのである。犬は現代までも、中国人の心のなかである一定の位置を占めているといえるだろう。